盛岡市遺跡の学び館　令和二年度　第十八回企画展

不来方之城新築之有可候

―南部氏の盛岡築城―

こずかたのしろしんちくこれあるべくそうろう

ごあいさつ

近年、城への関心が高まり、盛岡城も例外ではありません。盛岡南部氏による、盛岡藩政の拠点となった盛岡城跡は、雄大な石垣や堀の一部が残り、昭和 12 年（1937）４月 12 日、国の史跡に指定されました。昭和 59 年（1984）から石垣修復工事に伴って発掘調査を実施。昭和、平成、令和へと、発掘調査を継続し、城の歴史が少しずつ、明らかになってまいりました。

今年、令和２年（2020）は、盛岡藩祖南部信直が、豊臣秀吉から、南部七郡本領安堵の朱印状を交付された、天正 18 年（1590）から 430 年目、最後の藩主南部利恭が、盛岡藩政を終えた、明治３年（1870）から 150 年目にあたります。本企画展では、これまでの発掘調査成果を中心としつつ、関連資料もあわせて公開し、改めて、城の歴史を見つめ直します。多くの皆様の御来場をお待ちしております。

2020 年 10 月

盛岡市遺跡の学び館

《凡　例》

1　本書は、盛岡市遺跡の学び館第 18 回企画展「不来方之城新築之有可候」の展示図録である。
2　展示資料名、遺跡名、年代、挿図の内容等において、各遺跡発掘調査報告書等関連文献の記載内容と異なる場合は、すべて当館が責任を負う。
3　本書の掲載順序は、展示会場の順序と異なる場合がある。また、掲載資料の中には、今回の企画展示に出陳されていないものも存在する。
4　掲載資料の写真及び掲載図のうち、所蔵者提供者名のないものは、すべて当館の撮影写真または作成資料である。
5　本企画展、及び図録の作成は、盛岡市遺跡の学び館　福田淳・三浦志麻・菊地幸裕・津嶋知弘・今野公顕・花井正香・似内啓邦・杉浦雄治・鈴木俊輝・今松佑太・佐々木あゆみ・鈴木郁美・伊藤聡子が協力してあたり、室野秀文・千葉貴子・樋下理沙が編集した。
6　本企画展開催にあたり、次の機関と個人の方々より、御協力をいただいた。記して感謝申しあげる。
岩手県立図書館・岩手県立博物館・大宮神社・北上市教育委員会・雫石町教育委員会・紫波町教育委員会・二戸市教育委員会・もりおか歴史文化館。伊藤金人・太田悌子・小田嶋知世・神山仁・川向富貴子・熊谷博史・小西治子・佐藤由浩・柴田知二・鈴木亜希子・鈴木賢治・関敬一・中村善光・中村良幸・畠山美幸・福島茜。

《盛岡市遺跡の学び館第 18 回企画展開催要項》

期間　令和２年（2020）10 月３日（土）～令和３年（2021）１月 24 日（日）
会場　盛岡市遺跡の学び館企画展示室

《特別講演会》

日時　令和２年 11 月８日（日）13 時 30 分～15 時 30 分
演題　「城の石垣構築技法と盛岡城跡の魅力」
講師　東北芸術工科大学歴史遺産学科教授　北野　博司　氏

《目　次》

ごあいさつ・凡例・目次
序章　時を超えた要衝の地　1
Ⅰ　不来方城の時代　2
Ⅱ　築城　17
Ⅲ　盛岡城跡の発掘調査　23
終章　盛岡藩の終わり　35
盛岡城関係年表　38

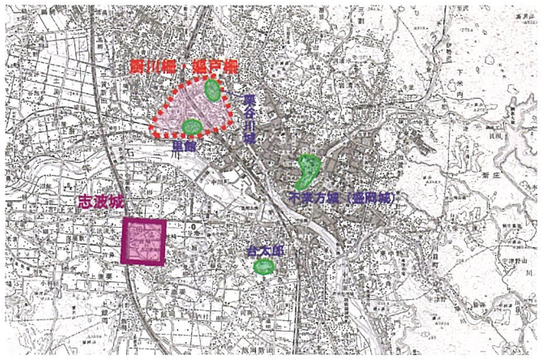
《後　援》

岩手考古学会、岩手史学会、岩手日報社、盛岡タイムス社、朝日新聞盛岡総局、読売新聞盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、時事通信社盛岡支局、共同通信社盛岡支局、河北新報社、産経新聞盛岡支局、デーリー東北新聞社、ＮＨＫ盛岡放送局、ＩＢＣ岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、岩手日日新聞社、岩手ケーブルテレビジョン、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか、アキュート、情報紙ゆうゆう

序章　時を超えた要衝の地

私たちの盛岡市は、北上川に雫石川・中津川が合流し、街道や舟運など、人や物の往来が活発なところであり、政治・経済の要であった。平安時代の初期、朝廷の東北政策北進の拠点として志波城（盛岡市中太田・下太田）が置かれた。また 11 世紀には、陸奥鎮守府の官人安倍氏は、奥六郡を影響下におき、岩手郡に厨川柵・嫗戸柵を置いた。時代は安倍氏から清原氏、平泉藤原氏へと移りつつも、地域の拠点性に変わりはなかった。

文治５年（1189）源頼朝は平泉藤原氏を攻略し、９月 12 日、岩手郡厨川で、工藤行光に岩手郡地頭職を与えた。岩手殿と呼ばれた工藤氏は、厨川を拠点に、岩手郡を治めた。しかし、鎌倉時代中頃、郡地頭職は北条氏へ移り、工藤氏は北条氏配下の厨川代官となり存続した。厨川より南東側の、北上川・雫石川の対岸地域は中野郷としてまとめられ、北条氏の岩手郡支配の要となっていた。南北朝時代末以後、不来方には福士氏が居住し、南部氏、斯波氏に属しながら、時代の変化に対応していた。戦国時代末の天正 16 年（1588）、南部信直は志和郡の斯波氏を攻略した。後に、南部信直・利直・重直は、豊臣氏から徳川氏へと政権が移る中、不来方に新城を築き、盛岡城と城下町を開いた。



要衝の地盛岡

盛岡城下図（川井鶴亭画　もりおか歴史文化館所蔵）

Ⅰ　不来方城の時代

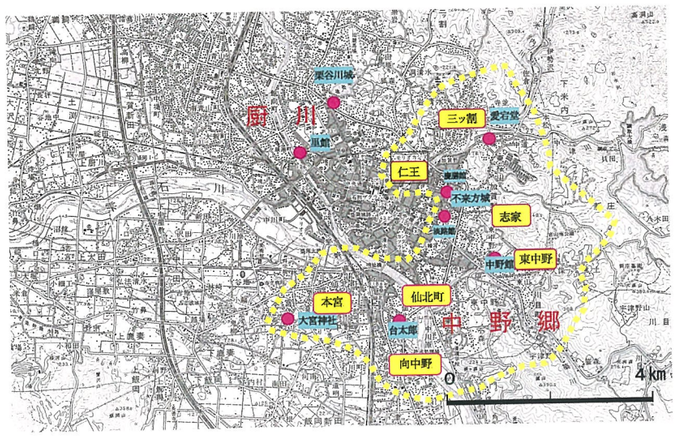
1　岩手郡中野郷と仁王郷不来方

現在の盛岡市内丸・本町通・三戸町・長田町付近は、かつての仁王村であり、仁王の名は、この地に平安時代後期（11 世紀）の十一面観世音菩薩像を本尊とする寺院があり、その仁王門に由来するという。また、現在の仁王・三ツ割・志家・東中野・本宮・向中野・仙北町にかけての一帯は、中世以来の中野郷である。このうち、不来方城周辺の中津川両岸地域を不来方と汎称した。

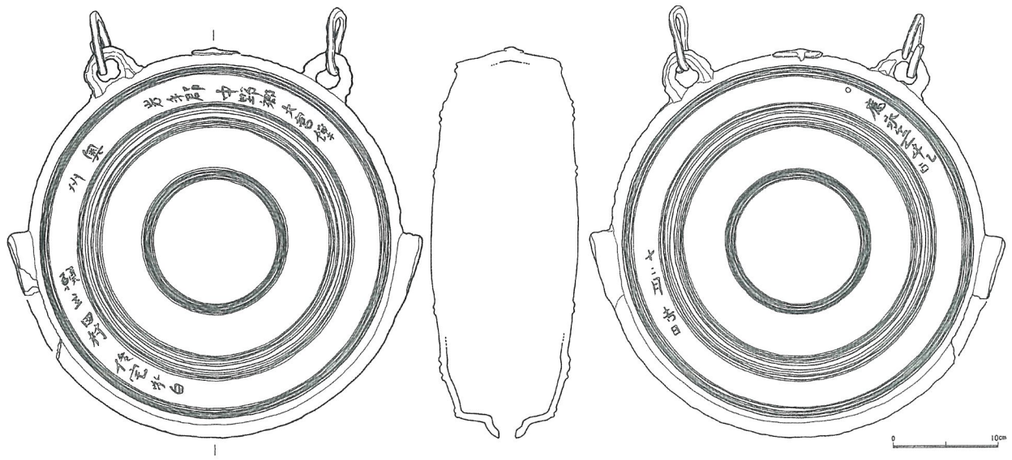
建武元年（1334）9 月 27 日の陸奥国宣（大石寺文書）に、岩手郡仁王郷が確認できる。中野郷の初見は応永 12 年（1405）12 月の鰐口（大宮神社所蔵：盛岡市指定文化財）の刻銘であるが、向中野台太郎遺跡には、鎌倉時代半ばから末にかけての、堀を廻らせた居館があり、村落や墓地、街道の跡も確認されている。北側の雫石川対岸域は、文治５年（1189）9 月 12 日に、岩手郡地頭となった工藤氏の本拠地厨川である。岩手郡地頭職は鎌倉時代のある時期までに、工藤氏から北条氏へ交代したと考えられており、台太郎遺跡が中野郷の支配拠点の一つであるとすれば、中野郷は鎌倉時代の中頃に成立した可能性がある。建武元年の仁王郷は、中野郷から一部が仁王郷として分立したのかもしれない。中野郷と仁王郷の変遷は、鎌倉時代から南北朝時代の政治状況と関係しているらしい。

不来方は、岩手郡中野郷・仁王郷の内にあって、古くからの交通の要衝であり、政治的、経済的にも、重要な場所であったと考えられる。

盛岡市指定文化財　鰐口（大宮神社所蔵）

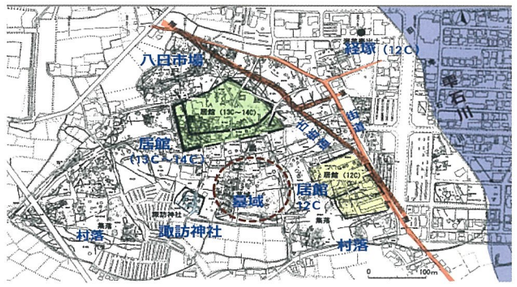


岩手郡中野郷

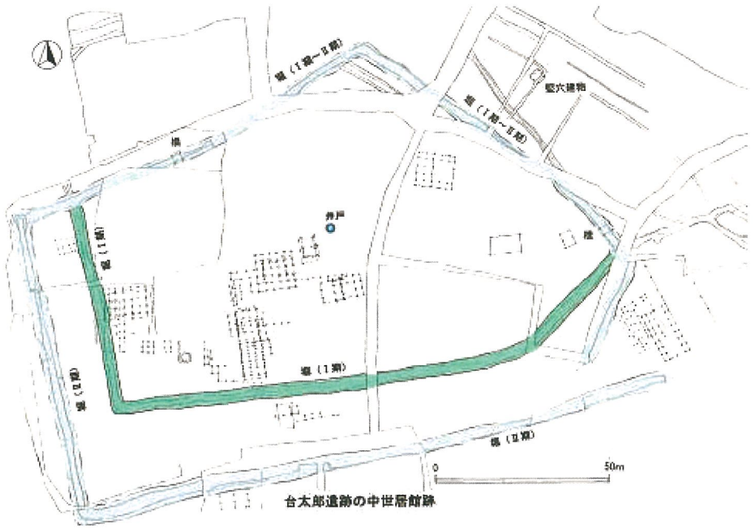


大宮神社鰐口実測図

向中野の台太郎遺跡は、雫石川南岸の街道沿いに営まれた居館で、周囲に集落の遺構が確認されている。同時代の仁王不来方には別の拠点が存在した可能性もある。



台太郎遺跡



中世居館跡

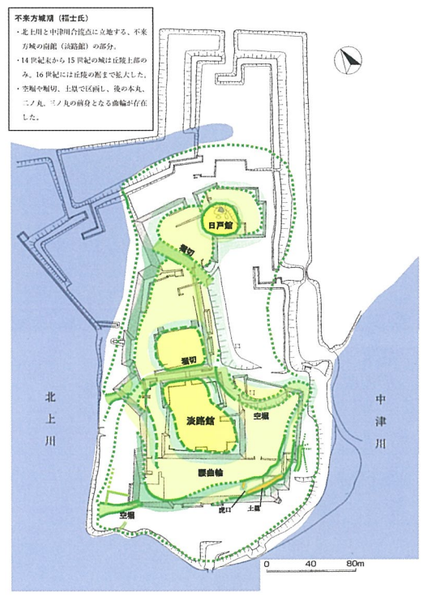
2　築城と完成

文禄元年（1592）、豊臣秀吉の唐入り（朝鮮出兵）に随い、南部信直は肥前名護屋（佐賀県唐津市）に出陣した。ここで信直は秀吉に、不来方の築城認可を願い出た。秀吉は「不来方については、浅野長吉がつぶさに検分して言上（報告）し、了解している。（信直の）願の通り勝手次第とすべし。」と認可した（祐清私記）。信直は国元の利直へ、築城認可を伝え、「何事も華美を慎み、城取り縄張の儀は、第一に内堀伊豆に能々相談し、奉行・諸頭共心おきなく（内堀伊豆に）相談いたすべし。」と指示している。築城の準備は、福士氏が不来方を退去した文禄３年（1594）ごろに始まり、慶長２年（1597）３月６日、鋤初め（起工式）が行われた（祐清私記）。

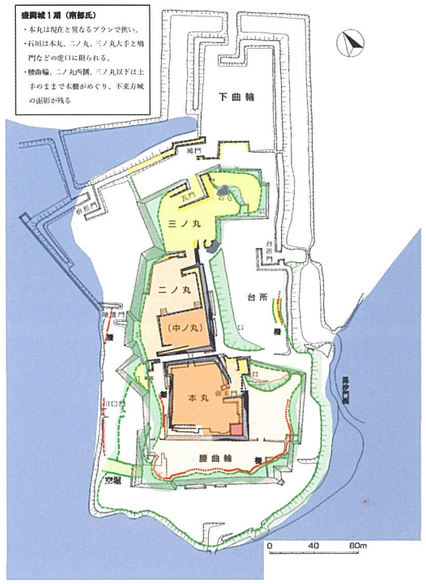
内堀伊豆頼式は北近江浅井氏の旧臣で、前田利家に仕えていた。天正 15 年（1587）以後、利家と信直との連絡の任にあたっていたもので、信直に請われて移り、南部家に仕えるようになった。内堀伊豆は、石垣技術集団の近江穴太衆ともつながりがあったと考えられ、城の縄張や石垣技術に精通していた。

盛岡城は慶長２年（1597）の鋤初めから工事が継続されたが、川の合流点の複雑な地形と洪水のため、工事は困難を極めた。また、毎年冬季間は工事を休止するなど、効率はよくなかった。さらに、慶長３年（1598）８月 18 日、豊臣秀吉が死去し、翌慶長４年（1599）10 月５日には、南部信直が福岡城（二戸市福岡）で死去した。翌慶長５年（1600）には関ケ原の合戦が起こり、南部利直も徳川家康の命令で、出羽国最上に出陣し、上杉勢と対陣中、旧和賀領の岩崎（北上市）で一揆が起こり、翌慶長６年（1601）４月に鎮圧している。この間、築城は休止され、慶長８年（1603）に工事が再開された。これによって、一応の城構えが整ったのが盛岡城１期である。慶長８年は徳川家康が征夷大将軍となり、江戸幕府を開いた年であり、南部利直は家康に伺いを立てて築城を再開した。大坂には豊臣秀吉の遺児秀頼がおり、各大名は徳川幕府に随いつつも、いまだ豊臣家に心を寄せる大名も少なくなかった。慶長 19 年（1614）の大坂冬の陣、翌慶長 20 年（元和元年：1615）の大坂夏の陣で豊臣家と徳川幕府が交戦した結果、豊臣家は滅亡した。同じ年、幕府は武家諸法度を発布し、新規の築城を禁止し、居城の修理・修築も、すべて徳川幕府の許可を得てから実施するよう命じられた。当時南部利直の居城は福岡城で、盛岡城は築城中。三戸城（青森県三戸町）や福岡城は遠距離であるため、幕府の許しを得て郡山城（紫波町）を使用し、築城を継続した時期もあった。元和元年（1615）築城を再開し、三戸から盛岡へ町が移転し始めた。元和２年（1616）には、７月 28 日と 10 月 28 日に、東北地方太平洋岸で大地震や津波被害があり、仙台城が大きく損壊した。盛岡城も少なからず被害があったものと推定され、元和３年（1617）から同５年（1619）にかけて、大規模な城普請を行った。この時は本丸の拡張と二ノ丸石垣の積み直し、腰曲輪と三ノ丸の石垣が構築された。これが盛岡城２期である。当時、城西側の北上川沿いは高い崖のままで、まだ石垣は構築されていない。寛永９年（1632）江戸で南部利直が死去し、重直が相続した。寛永 10 年（1633）３月下旬から４月にかけて、盛岡城惣がわ（総構）の柴垣が整備された。惣がわとは、後に遠曲輪とよばれる総構えのことで、土塁上に柴垣を整えるのは、城の総構え完成を意味する。このとき２代藩主南部重直が、江戸から国元に向かっており、同年５月８日に初めて盛岡城へ入城した。以後盛岡城が藩主居城と定まり、この時を以て盛岡城の完成と言えるだろう。

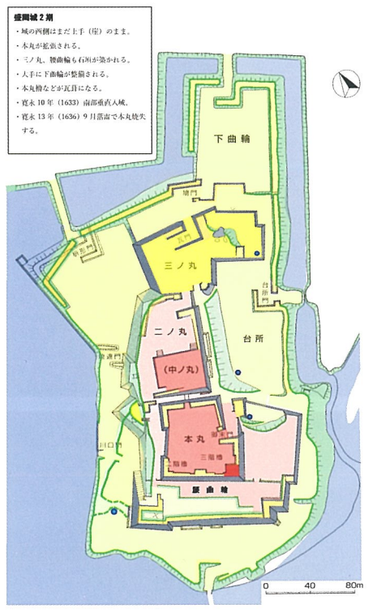
その後、寛永 13 年（1636）９月に本丸を焼失したが、寛文 13 年（1673）以後、本丸を再建し、貞享３・４年（1686・1687）までに二ノ丸西側石垣を完成させた。これが盛岡城３期である。再建された本丸の三重櫓・二階櫓、腰曲輪の櫓には、耐寒性に優れた赤瓦（瀬戸瓦）が葺かれ、城下町や街道筋に向け、その威容を誇った。



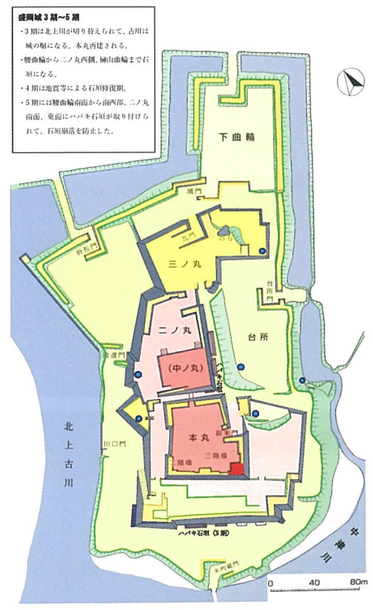
不来方城期



盛岡城１期



盛岡城２期

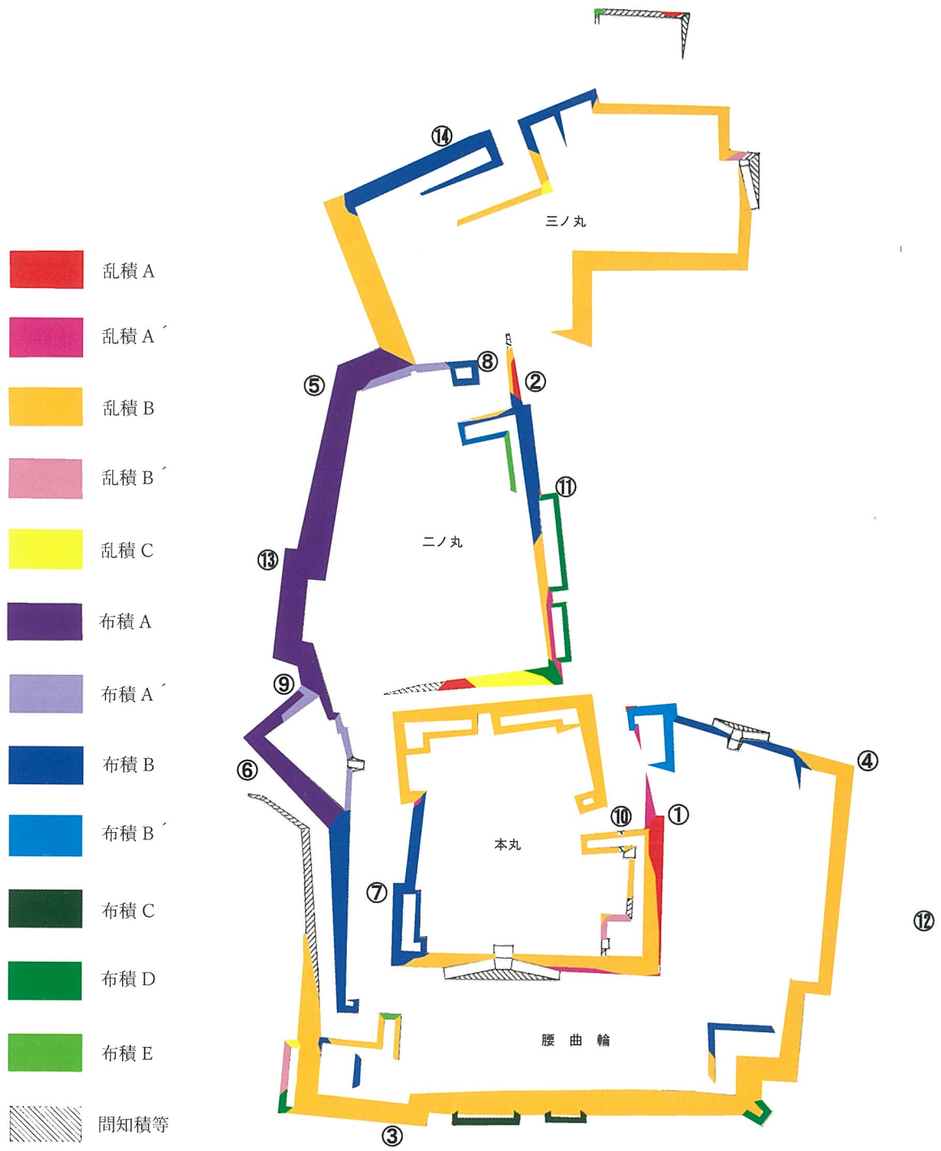


盛岡城３期以後

城郭の変遷

本丸南西部１期の石垣

本丸南西部１期の石垣

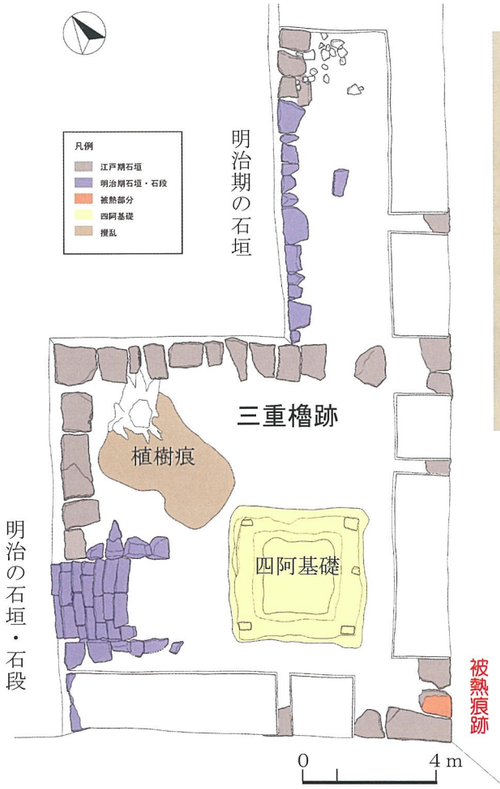


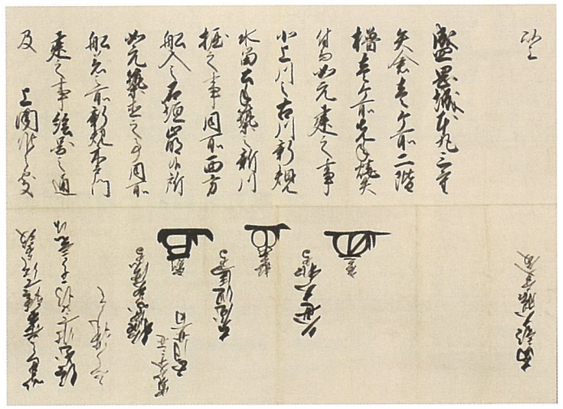
石垣の分類 ※図中の丸数字は 26・27 ページの写真の位置を示す

2　城の遺構

盛岡城跡は明治の岩手公園開設以後の改変箇所があり、門跡や二ノ丸御殿跡などの石垣が失われた。発掘調査では改変された個所を確認し、本丸や腰曲輪の櫓台を復元した。

城の建物では櫓跡、門跡、蔵跡、本丸御殿の一部である礎石建物跡、掘立柱建物跡、御台所の礎石建物跡、塗師小屋跡である掘立柱建物跡などが調査されている。櫓跡は、明治の公園開設以後の改変が著しく、特に櫓の柱配置を示す礎石はほとんど抜き取られ、東屋の建設で掘削されていた。特に本丸三重櫓（天守）跡の礎石は一切残されていなかった。その一方、腰曲輪二階櫓は新旧の石垣が確認されて、規模が拡大されていることが判明している。また、腰曲輪南西隅の櫓は、内側の石垣根石が残存し、瓦の堆積もあり、不明確であった櫓の存在が確認された。近年の調査では御台所北部の塗師小屋跡の調査が特筆される。長大な掘立柱建物跡が確認され、漆の漉し殻が多く出土し、漆関係の工房跡であることが判明した。また鉄滓も出土しており、塗師小屋以前に鍛冶工房が置かれた可能性が考えられた。また、御台所の一部や御台所門石垣の一部も確認されている。

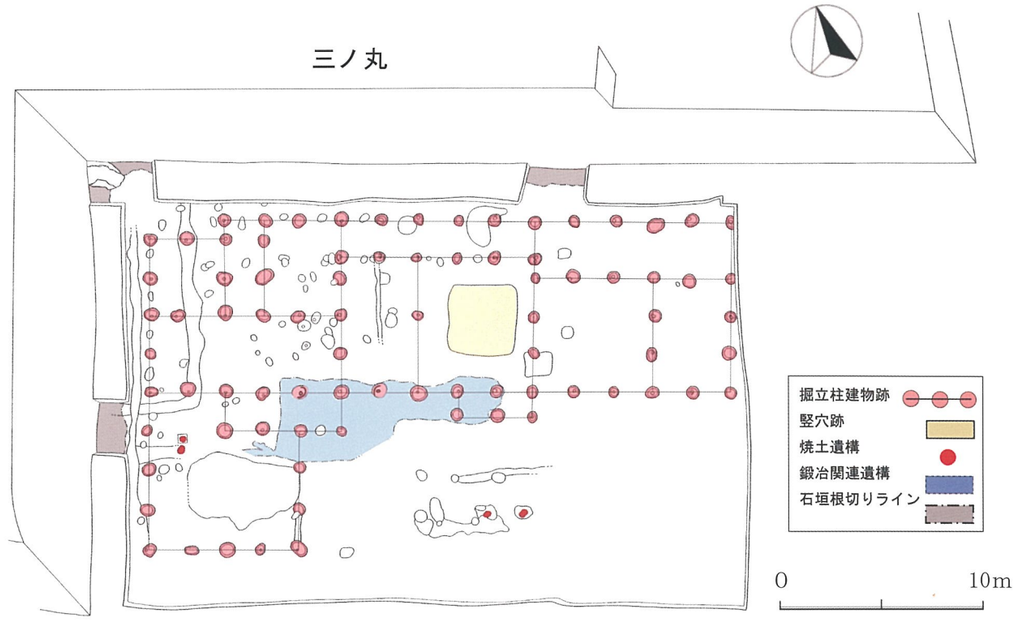




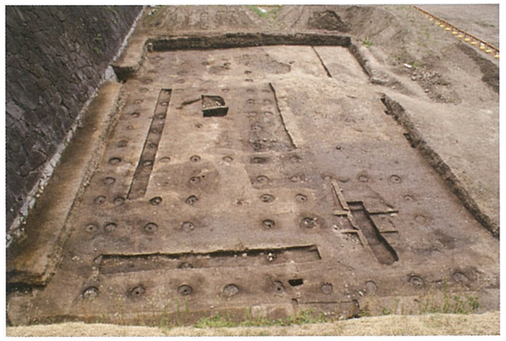
盛岡城普請許可幕府老中奉書
（もりおか歴史文化館所蔵）

２期の三重櫓は寛永 13 年（1636）の火災により二階櫓とともに焼失。３期の延宝２年（1674）から同４年にかけて再建された。このとき櫓台石垣も積みなおされたが、北西隅根石には２期の角根石が原位置で残されており、２期と同規模で再建されたことが確認された。

三重櫓跡



塗師小屋跡



塗師小屋跡（西から）

三ノ丸石垣入角部の根石

漆漉し殻出土状況

漆漉し殻

4　陶磁器

盛岡城の１期～２期には、瀬戸・美濃・唐津の灰釉・鉄釉陶器類、信楽の壷のほか、中国明末から清の初めにかけての染付の皿、湯飲みなどが出土している。網目の中に赤、緑、金で色付けされた天啓赤絵の皿も出土している。３期以後は瀬戸・美濃製品の他、九州北部の伊万里に代表される肥前磁器の染付や青磁が多数出土しているほか、在地生産の擂鉢など陶器類も出土している。また、江戸時代中期から末期の４期・５期には、寺町窯や山蔭窯、花古窯の製品も城内で使用されていた。土器では神事に用いられるかわらけ、遠曲輪跡からは焜炉が出土している。

中国染付破片（16 世紀～17 世紀）

織部水指破片・黒織部茶碗破片（17 世紀）

終章　盛岡藩の終わり

慶応３年（1867）12 月９日、徳川幕府第 15 代将軍徳川慶喜は、王政復古の大号令を発して将軍職を辞し、徳川幕府は終わった。翌慶応４年（明治元：1868）年１月戊辰戦争が始まる。５月６日、白石城（宮城県白石市）において奥羽越列藩同盟が結ばれ、会津藩と庄内藩を朝敵から除外するよう新政府に嘆願したが、これが却下されると、そのまま軍事同盟へと移行した。盛岡藩内は意見が割れていたが、主席家老楢山佐渡の主張により、同盟から新政府側となった秋田藩討伐を決定。野辺地・鹿角・雫石から秋田領に進軍し、８月 22 日に大館城（大館市）を攻略した。秋田藩はきみまち坂（能代市二ツ井）に布陣して盛岡藩の進軍を阻止。海路から新政府軍が秋田藩に合流すると形成は逆転し、盛岡藩は撤退を余儀なくされた。楢山佐渡らが撤退中、藩庁の盛岡城も新政府軍に押さえられた。９月 24 日盛岡藩は降伏。藩主南部利剛は謹慎し、南部利恭が継いで白石藩に転封した。明治２年７月 22 日盛岡藩復帰が認められたが、明治３年（1870）７月 10 日南部利恭は財政難を理由に盛岡藩知事辞任を願い出て、藩政を終了。明治５年（1872）１月８日、盛岡県は岩手県と改称した。

日輪違菱紋二枚胴具足（個人所蔵）
左上の二枚胴具足は盛岡藩足軽の御貸し具足で、前胴と後胴には日輪の中央に違菱紋がある。盛岡藩の具足や陣笠に用いられたこの紋は、武田菱をアレンジした組菱紋で，盛岡藩では違菱紋と呼び，現在は盛岡市市章となっている。

鉄黒漆塗伊予札二枚胴具足
右は戊辰戦争の時、鹿角口から大館に進軍した東野万五郎政忠の着用した具足で、近年ゆかりの方から盛岡市に寄贈された。兜は後補である。